

シンポジウム 東日本大震災から5年 復興公営住宅における集住のかたち －研究者と実務者のクロストーク 2－

震災という未曾有の出来事を経験したからこそ生まれる理想的な集住のかたちがある。阪神淡路大震災ではコレクティブハウジングが生まれ、東日本大震災でもこれまで実現困難であった計画が生まれてきている。復興に向けた力が新しい公営住宅のかたちへと結びついている。また、東日本大震災は、超高齢化や過疎化というこれから多くのまちが抱えるであろう問題を露わにした。復興公営住宅の建設では、住まいをつくるという以上に、10年後、20年後の「地域のあるべき姿」を踏まえた住まいとまちの計画が求められている。このように復興公営住宅の取り組みは、震災復興だけに留まらず、日本各地におけるこれからの公営住宅を考える有用な知見となる。本シンポジウムでは、復興公営住宅の設計に携わる設計者と研究者とのクロストークにより、これからの集住のかたちについて議論したい。

主催：建築計画委員会 住宅計画運営委員会 住宅計画小委員会
後援：集合住宅研究会
日時：2016年3月15日（火）13：30～17：00
会場：建築会館会議室（港区芝5-26-20）

<プログラム（予定）>

主旨説明：川崎直宏（株式会社浦ハウジング&プランニング）

【第一部 東日本大震災復興公営住宅における新しい取り組み】

1. 多賀城市宮桜木住宅における復興公営住宅の試み
関 邦紀（株式会社アルセッド建築研究所）
2. 女川町営運動公園住宅におけるコミュニティ・工期を踏まえた復興公営住宅の取り組み
照沼 博志（株式会社山設計工房）
3. 玉浦西 B-1 地区と石巻市北上町支援における前提条件の整理と計画の実践
手島 浩之（株式会社都市建築設計集団）
4. 田野畑村・女川町における地域の住宅生産体制を活用した木造災害公営住宅の整備
奥茂 謙仁（株式会社浦ハウジング&プランニング）

【第二部】研究者と実務者のクロストーク

・研究者の立場から：

阪神・淡路大震災後の計画研究成果の活用とコミュニティ重視型復興公営住宅の実現

小野田 泰明（東北大学）

阪神・淡路大震災の検証－災害復興公営住宅の成果と課題－

檜谷美恵子（京都府立大学）

・実務者の立場から：関邦紀、照沼博志、手島浩之、奥茂謙仁（いずれも前掲）

コメンテーター：高井宏之（名城大学）、高田光雄（京都大学）／ 司会：鈴木雅之（千葉大学）

参加費：会員 1,500 円、会員外 2,500 円、学生 1,000 円、後援団体 2,000 円（資料代含／当日会場払い）

定員：70 名（申込み先着順）

申込方法：Web 申し込み <https://www.aij.or.jp/index/?se=sho&id=1386> よりお申し込みください。

申込問合せ：日本建築学会事務局 事業グループ 榎本

TEL：03-3456-2051 E-mail：enomoto@aij.or.jp